

最澄における荊溪湛然の位置

英亮

【要旨】

従来、最澄〔七六六・七六七一八二二〕は、中国天台学派・六祖荊溪湛然〔七一一七八二〕一道遼一最澄という天台学派の系譜に位置付けられており、その思想についても湛然の著作を踏襲していると見なされてきた。しかしながら、他宗觀という点に注目すると、最澄の著作を通して湛然を重視した記述は限定的であり、その位置づけについても、再考すべき余地があることを論じた。

はじめに

日本天台宗の祖・最澄は、湛然一道遼一最澄という系譜に属しており¹、湛然からの影響を受けていたと従来指摘されてきた²。この湛然は、「禪宗や華嚴宗の人々に対する反撃に先立って、天台法門伝承内部の他の集団に対する警戒と対決という喫緊な課題に対処しようとする³」、いわゆる「天台佛教復興運動⁴」を展開したことで名高い。

しかしながら、そういった湛然の他宗觀と、最澄の基本的な他宗觀を比較した場合、その性格は大きく異なっていると言えよう。最澄の基本的な他宗觀について言えば、以下のような特徴が見られる。

(一) 最澄は、南都六宗と「天台法華宗」が協力して「護国」することを望んでいた(『顯戒論縁起』(『伝全』一、二九二一二九三))。

¹ 最澄撰『血脉譜』『天台法華宗相承血脉譜』(『伝全』一、二一五一二三〇)。

² たとえば、浅井円道〔一九七三〕、佐伯有清〔一九九三〕、水上文義〔二〇〇八〕、大久保良峻〔二〇一五〕など、枚挙にいとまがない。

³ 池麗梅〔二〇〇八〕(二九九)。

⁴ 「天台佛教復興運動」については、池麗梅〔二〇〇八〕「第四章 『止観輔行伝弘決』による天台止観実践理論の正規化—懺悔実践の整備を例として—」に詳しい。

(二)最澄は華厳教学を依用しており⁵、法相教学を擁護している点や⁶、禪を重んじている点も確認できる⁷。

(三)最澄のいわゆる論争書の一部(『守護章』『決權実論』)は、「華嚴・涅槃・三論家、三宗大徳」(『守護章』『伝全』二、六四六)といった読者を想定している⁸。

これらを見ても分かるように、帰朝してからの最澄が、湛然の「他宗批判」について言及する箇所はほぼ見られない。その上、最澄は、華嚴学派の澄觀[七三八一八三九]を重要視し、法相学派の基[六三二一六八二]を擁護するなど、他学派の諸師に対しても寛容な態度を示しているため、湛然の「他宗批判」とは性格を異にしている。ところが最澄は、晩年の弘仁十二年(八二一)になると、(1)~(3)の他宗觀を脱却し、湛然の「他宗批判」を受容するに至っている。

つまり、帰朝後の最澄は、湛然の「他宗批判」を受容しておらず、晩年に至ってその位置づけを改めたことが予想される。このことは、当初の最澄が“六祖”または“中興の祖”として湛然を重要視する意図が希薄だったことを示す端緒となるだろう。本稿では以上の点を論じていきたい。

最澄が将来した湛然の著作—最澄撰『台州錄』・『越州錄』に基づいて—

まずは、最澄が将来した湛然の著作について確認しておく。『伝教大師将来台州錄』(『伝全』四、三五一—三六九、以下『台州錄』)、『伝教大師越州錄』(『伝全』四、三七一—三八四、以下『越州錄』)に基づき、湛然の著作と、湛然に関する書物を抜き出せば以下のようになる。

⁵ 由木義文[一九七四]、吉津宜英[一九八七]・[一九九七]、木内堯大[二〇〇八]、進藤浩司[二〇〇八]、英亮[二〇二一]。

⁶ 寺井良宣[一九八九]。

⁷ 伊吹敦[二〇一三(一)]、[二〇一三(二)]、[二〇一三(三)]、[二〇一四(一)]、[二〇一四(二)]、[二〇一六]。

⁸ 田村晃祐[一九九二](七四)、師茂樹[二〇一五](三八二)。

台州錄に見られる湛然の著作	卷数	紙数	『伝全』頁
妙法蓮華經玄義釈	十卷	三百四十三紙	三五一
妙法蓮華經文句疏	十卷	五百一十五紙	三五一
妙法蓮華經三昧補助儀	一卷	三紙	三五二
摩訶止観輔行伝弘決	十卷	七百四十七紙	三五二
摩訶止観文句	二卷	七八八紙	三五三
摩訶止観義例	二卷	三十一紙	三五三
摩訶止観大意	一卷	一十紙	三五三
観誦經記	一卷	五紙	三五四
方等懺補闕儀	一卷	三紙	三五四
維摩經疏記	三卷(或六卷)	一百四十八紙	三五五
維摩經略疏	十卷	三百九十四紙	三五五
涅槃後分科文	一卷	六紙	三五五
學意三昧文句	一卷	一十紙	三五七
大般若經疏	一十五卷	五百八十九紙	三五八
金剛婢論	一卷	一十五紙	三五八
華嚴經骨目	一卷	五十八紙	三五九
受菩薩戒文	一卷	一十紙	三六〇
越州錄に見られる湛然の著作			
天台大師誦經觀記	一卷	記述無	三七五
その他・湛然に関連する書物			
天台山六祖略伝	一卷	七紙	三五六
天台山第六祖荊溪和尚碑	一卷	五紙	三五七
止観輔行伝序	一卷	記述無	三七五
釈籤緣起序	一卷	記述無	三七五
妙樂和上遺旨	一卷	記述無	三七五
祭第六祖荊溪和上文	一卷	記述無	三七五
唐仏隣故荊溪大師讚	一卷	記述無	三七六

この表に基づくと、最澄によって将来された湛然に関わる書物は、全二十五部を挙げることができる。しかしながら、現存する最澄の著作において、湛然の著作およびそれにかかる書名が明確に挙げられるのは、わずかに七部（傍線部分）に過ぎない。将来した数と比較すると、最澄の著作中に使用された湛然の書物は極めて少ないと分かることだろう。以上の点を踏まえつつ、最澄が自著において湛然に言及する箇所を成立順に確認していきたい。

最澄撰『依憑集』における湛然

最澄撰『大唐新羅諸宗義匠依憑天台集』（以下『依憑集』）とは、「中国と朝鮮の種々の宗派の学僧達が天台の教義をよりどころにしていた、ということを示そうとしたもの」であり、本文は弘仁四年（八一三）に成立し、その後弘仁七年（八一六）に序文が付されている。この書においては、湛然の著作が二箇所引用されている。一箇所目は、「天竺名僧聞大唐天台教迹最堪簡邪正渴仰訪問縁」（『伝全』三、三六〇—三六一）である。

天竺の名僧、大唐の天台の教迹を聞きて、最も邪正を簡ぶに堪えたりと、渴仰訪問の縁。

法華文句記の第十卷の末に云わく、たまたま江淮の四十余僧と、往きて台山に礼す。因りて不空三藏の門人含光の、勅を奉じ山に在りて修造するを見る。云わく、不空三藏と、親しく天竺に遊ぶ。彼に僧あり。問うて曰わく、大唐に天台の教迹あり。最も邪正を簡び、偏円を曉むるに堪えたりと。能くこれを訳して、この土に将至すべけんや。あに中国に法を失して、これを四維に求むるにあらずや。しかもこの方、有識少なく、魯人のごときのみ。ゆえに徳に厚く道に向かう者は、これを仰がざるはなし。敬い願わくは学者行者、力に隨いて称賛せよ。まさに知るべし、自行は人を兼ね、ならびに他典と異なり。若しは説、若しは聽、境智存すや。若しは冥、若しは顕、種熟期すべし。（中略）一句一偈、菩提を増進し、一色一香、永く退転なけん云々。

天竺名僧、聞大唐天台教迹、最堪簡邪正、渴仰訪問縁。

法華文句記第十卷末云、適與江淮四十余僧、往礼台山。因見不空三藏門人含光、奉勅在山修造。云、與不空三藏、親遊天竺。彼有僧。問曰、大唐有天台教迹。最堪簡邪正、曉偏圓。可能訳之、將至此土耶。豈非中國失法、求之四維。而此方、少有識者、如魯人耳。故厚德向道者、莫不仰之。敬願学者行者、隨力稱讚。応知、自行兼人、並異他典。若説、若聽、境智存焉。若冥、若顯、種熟可期。（中略）一句一偈、增進菩提、一色一香、永無退転（『伝全』三、三六〇—三六一）。

最澄は、印度の僧侶が天台の教述を賛嘆していることを示すために、湛然撰『文句記』（『大正』三四、三五九下—三六〇上）を引用しているものの、湛然の「他宗批判」に言及してはいない。

二箇所目は、以下の通りである。

伏して願わくば、有心の君子、愛憎の情を放れて、諸宗の憑を熟察せよ。ただ惠苑の所及、名濫の失あり、利渉の所到、煩重の謗あり、則ち恥を後生に挙し、愚を可畏に顧す。若し疑心あらば、澄觀の経疏を披き、湛然の疏記を聞かんのみ

伏願、有心君子、放愛憎之情、熟察諸宗之憑。但惠苑所及、名濫之失、利渉所致、煩重之謗、則挙恥於後生、顧愚於可畏。若有疑心者、披澄觀経疏、聞湛然疏記耳（『伝全』三、三六四）。

傍線部は、諸宗の師が天台に依頼していることに疑いがあるならば、澄觀〔七三八一八三九〕や湛然の「疏記」を読むべきである、と最澄が勧める場面である（傍線部）。ここで「湛然疏記」とあるのは、一箇所目に確認した湛然撰『文句記』の記述を指すと見られる。この箇所においても、華嚴学派の澄觀を湛然と同様に扱っていることからして⁹、湛然の「他宗批判」は意識していなかったと推察される。

最澄撰『守護章』における湛然

最澄撰『守護国界章』（以下『守護章』）とは、「弘仁九年（八一八）」に成立し、「徳一の『中辺義鏡（章）』を批判した書物である¹⁰」とされ、最澄の著作の中で最も大部（全九巻）を数える。この書では湛然について言及する箇所が見られるものの、その「他宗批判」については触れられていない¹¹。一覧としてまとめれば、以下の通りである。

⁹ 最澄は、その著作全体を通して澄觀を重用していることが窺える（英 亮 [二〇二一]）。このことも、最澄が湛然の「他宗批判」を視野に入れていないことの傍証となるだろう。

¹⁰ 田村晃祐 [一九七九] (一二二)。

¹¹ この点については、師茂樹 [二〇一五] (三五七—三五八) がすでに疑問視している。

書名の記載	著者名の記載	頁
① (法華文句) 記	毘盧	一八八
② (法華文句) 記	無	二六九一ニ七三
③ 摩訶止觀輔行伝弘決	無	二九二
④ 法華玄義釈籤	無	二九四
⑤ (法華文句) 記	無	三六七一三六九
⑥ 作頌曰	荊溪	三七二
⑦ (法華) 文句記	無	四一九
⑧ (法華文句) 記	無	四八〇
⑩ 金鉢 (論)	無	五二五

以上が、最澄撰『守護章』において、湛然とその著作について言及する箇所である。これらの該当箇所は、他学派の諸師について最澄が言及する箇所、たとえば法寶〔生沒年不詳〕(七宝台・宝公)が十二箇所¹²、靈潤〔生沒年不詳〕が五箇所¹³、澄觀〔七三八一八三九〕(大原府)が七箇所¹⁴、法雲〔四六〇一五二九〕(法雲)が四箇所¹⁵、元曉〔六一七一六八六〕が四箇所¹⁶と比較しても、決して多いとは言えない¹⁷。なお、①～⑩の要点をまとめれば次のようになる。

- ①湛然撰『文句記』(『大正』三四、三二一下)における、論藏の区別に関する記述の引用。
- ②湛然撰『文句記』(『大正』三四、二三五上一下)に記載の、『法華論』解釈の引用。
- ③湛然撰『輔行』(『大正』四六、二四九中)における、『摩訶止觀』の誤字の指摘に関する引用。

¹² 法寶(七宝台・宝公)(『伝全』二、二三四、五一六、五六四、五七八(二箇所)、五七九(二箇所)、五八〇(二箇所)、五八一、五八二、六四七等)。

¹³ 靈潤(『伝全』二、五一六、五四〇、五四一、五六四、五七二等)。

¹⁴ 澄觀(『伝全』二、一六五、一六七、一九三、二一一、二七五、四一四、五一六、五六四等)。

¹⁵ 光宅(法雲)(『伝全』二、二七四、四二〇、四五九、四九三等)。

¹⁶ 元曉(『伝全』二、二四三、四一四、五一六、五六四等。二二九、二四一は徳一の言及によるものなので、省略した)。

¹⁷ なお、最澄はこれらの諸師に対して好意的であり、天台教学を容認している諸師と見ている(ただし、最澄は、法寶に対して異論を唱えている場合がある。詳細については、塩入亮忠[一九一八]、田村晃祐[一九九二](七一—七二)等を参照)。

- ④湛然撰『釈籤』(『大正』三三、八九五上)における、智顗説『法華玄義』の科段に関する部分の引用。
- ⑤湛然撰『文句記』(三四、二二三下一二二四中)に記載される、『法華論』を解釈する部分の引用。
- ⑥徳一が『法華論』に反していることを示すために、荊溪(湛然)の偈頌(『金剛鉢』『大正』四六、七八五下)を引用。
- ⑦声・名のみを『法華經』の「經体」とする徳一の見解に対して、正しくは声・名・句・文等を「經体」とすべきだと最澄は主張する。この根拠として、湛然撰『文句記』(『大正』三四、三三五下—三三六上)の名称のみを挙げる。
- ⑧「七善」という語に関して、湛然撰『文句記』(『大正』三四、二〇五中)の注釈箇所を引用。
- ⑨徳一が『法華論』に反していると最澄を批判するが、最澄は徳一の批判自体が間違っていると非難する。その根拠として、湛然撰『文句記』(該当箇所不明)の名称のみを挙げる。
- ⑩有情=真如=仏性、非情=真如=法性とする徳一の見解に反駁するため、湛然撰『金鉢論』の名称を引証として挙げる。

以上の点をまとめると、最澄撰『守護章』では、『法華論』に関して言及する場合に湛然の著作を引用している割合が高い。それ以外では、語句の注釈として参照している箇所(①③④)が挙げられる。

このように、最澄撰『守護章』では湛然の「他宗批判」には直接触れられた箇所はない。強いて挙げれば、⑥⑦⑨⑩であるが、これらは「他宗批判」というよりも、「徳一固有」の經典解釈に批判の矛先が向けられていると言えよう¹⁸。

また、最澄撰『守護章』には、天台や他宗の諸師を挙げて徳一批判を繰り広げる箇所が存在するが、ここに湛然を含んでいない点も注意される。

[徳一] 魁食者また曰わく、あるいは愚夫あり。仏のこの密意を解せず、ひとえに經文に執す。唱えて言わく、如來ただ一乗のみにして二乘なしと説くをもって、明らかに知りぬ、定性の二乗、不定性の二乗、みな悉く成仏す、と。

[最澄] 弹じていわく、魁食者の指すところの愚夫とは、誰人なるや。もしさ定不定

¹⁸ 本稿では詳しく取り上げないが、最澄撰『守護章』では法相教学に対して寛容であり、その批判の矛先は「徳一固有」に限られることが指摘されている(寺井良宣[一九八九])。このことは、最澄が『守護章』を執筆した背景を考察する上で重要な手掛かりとなりうる。詳細は別稿を期したい。

性、みな成仏すち言わば、これ愚夫なりとは、釈迦、毘盧遮那仏、多宝仏、天親菩薩、堅意菩薩、真諦三藏、日照三藏、実叉難陀三藏、衆賢三藏、智儼三藏、流志三藏、金剛智三藏、無畏三藏、不空三藏、般若三藏、竺道生、南嶽、天台、杜順、法寶、靈潤、灌頂、利涉、智威、慧威、法藏、元曉、慧苑、通玄、澄觀等、みなともに同じく定不定性、みな悉く成仏すと云う。あに愚夫なるべけんや。

[徳一] 魁食者又曰、或有愚夫。不解仏此密意、偏執經文。唱言、以如來說唯一乘無二乘、明知、定性二乘、不定性二乘、皆悉成仏。

[最澄] 弹曰、魁食者所指愚夫者、誰人耶。若言定不定性、皆悉成仏者、是愚夫者、釈迦、毘盧遮那仏、多宝仏、天親菩薩、堅意菩薩、真諦三藏、日照三藏、實叉難陀三藏、衆賢三藏、智儼三藏、流志三藏、金剛智三藏、無畏三藏、不空三藏、般若三藏、竺道生、南嶽、天台、杜順、法寶、靈潤、灌頂、利涉、智威、慧威、法藏、元曉、慧苑、通玄、澄觀等、皆俱同云定不定性、皆悉成仏。豈可愚夫（改行と〔〕は筆者が加えた。『伝全』二、五一六）。

この箇所では、最澄が「定・不定性は皆悉く成仏す」ことの根拠として、印度・中国・朝鮮の諸師を列挙している¹⁹。しかしながら、湛然についての言及はない。南嶽（慧思）〔五一五—五七七〕、天台（智顥）〔五三八—五九八〕、灌頂〔五六一一六三二〕、智威〔生没年不詳〕、慧威〔生没年不詳〕などの天台に関わる祖師が列挙されるにも関わらず、湛然の名称が記載されないのは不自然であろう。ここにおける最澄の意図は明白でないが、少なくとも『守護章』では湛然を“六祖”あるいは“中興の祖”として意識していなかったようである²⁰。

¹⁹ また、この箇所で注目されるのは、華嚴教学を信奉している法藏〔六四四一七一二〕、澄觀〔七三八一八三九〕の名を最澄が挙げている点である。これは、湛然が華嚴教学を非難したことと明らかに矛盾している。また、天台に対した利涉〔生没年不詳〕（『文句記』、『大正』三四、三五二上一中）が、諸師の一人に数えられている点も特徴的である。

²⁰ 最澄撰『決權實論』においても、同様の箇所が見受けられる。それは、不定種姓の二乗が分段身を延ばした後に成仏するという徳一の説に対して、最澄が以下のように反駁する箇所である。

山家救曰、不定性二乗、延分段身、至金剛位。愚智共許者、此言不爾。但愚者為許、智者不許故。當知、道生、吉藏、靈潤、法寶、法藏、慧苑、定賓、澄觀、法相宗義寂、義一、良貴等、新羅國元曉法師、我大日本國上宮聖德王、約一乘実教、都不許延身。北轍者、學無薬師、獨居東隅。何輒得智愚智共許。其愚誰人。其智何人。況復天竺來唐曇牟讖三藏、流支三藏、真諦三藏、實叉難陀三藏、日照三藏、流志三藏、金剛智三藏、無畏三藏、不空

最澄撰『破比量文』における湛然

最澄撰『通六九証破比量文』（以下『破比量文』）とは、「最澄が徳一との論争の過程で、徳一の主張の一根拠をなしている、中國法相宗の初祖窓基の『成唯識論掌中樞要』の一部を批判した書²¹」であり、およそ弘仁十年（八二〇）頃に著されたものである。最澄撰『破比量文』の序文には、湛然に関する言及が確認できる。

大唐貞觀十九年の後、顯慶年中、玄奘三藏、大乘基師、十師の論を雜揉し、十師の義を楷定す。訳して十卷となし、名づけて成唯識論と曰う。即ち成唯識論掌中樞要二巻を造す。その上巻、初めの所被の文に六証を引き、一量を立てて云わく、二乗の果、まさに定性あるべし。また九証を引きて、一量を立てて云わく、所說の無性、決定してまさにあるべし。今大**唐天寶年中**、**天台法華宗第六祖毘盧遮那佛**湛然、法華の旨に依りて、**權實の利を定め、三乗の經論を会し、一乗の經論に歸す**。いまこの所伝に依りて、六証を通し、一量を破して云わく、二乗の果、まさに定性なかるべし。伏して願わくば、一乗の賢哲、幸に殿最を昭らせ。

大唐貞觀十九年後、顯慶年中、玄奘三藏、大乘基師、雜糅十師論、楷定十師義。訳為十巻、名曰成唯識論。即造成唯識論掌中樞要二巻。其上巻、初所被文引六証、立一量云、二乗之果、應有定性也。又引九証、立一量云、所說無性、決定應有。今大**唐天寶年中**、**天台法華宗第六祖毘盧遮那佛**湛然、依法華旨、定權實理、會三乘經論、歸一乘經論。今依此所伝、通六証、破一量云、二乗之果、應無定性也。伏願、一乘賢哲。幸昭殿最歟（『伝全』二、七二三）。

傍線部では、湛然が法華の旨に依って權實の理を定め、三乗の經論を会し、一乗の經論に歸させたことが強調されている。その上で、基撰『成唯識論掌中樞要』の六証一量を会

三藏、般若三藏等、立悉有仏性、盛傳一乘教。定性二乘、具三種余、必死闡提、皆悉成仏。況復馬鳴菩薩、龍樹菩薩、俱得經記、天親菩薩、堅慧菩薩、青辨論師、智光論師、說內證一乘、傳三平等義。況復我南岳、天台、昔仏在世時、於靈鷲山中、親聽法華經、願力生隋國、傳說一乘義。大唐聖僧中、兩聖為堯舜、傳錄豈伝空哉（『伝全』二、六九九—七〇〇）。ここでは、最澄が、徳一を批判する根拠として唐・朝鮮の諸師を列挙している。ここにおいても、最澄は湛然を挙げていない。湛然は『文句記』（『大正』三四、一六九上、二九五上）等において、基の分段身解釈を批判しており、最澄が湛然を挙げないことを疑問が残る。

²¹ 田村晃祐 [一九七九] (一六九)。

通すると最澄は表明する。ところが、「湛然の三大部注釈書、即ち、『玄義釈籤』『文句記』『止觀補行』の文章が、そのまま『通六九証』に引用されている箇所は何処にもない²²」と指摘される通り、最澄撰『破比量文』の本文中には、湛然とそれに関する著述を用いて基を批判した箇所は見られない。

最澄撰『破比量文』にある序文の意図、ならびに真偽は慎重に検討する必要があるもの²³、最澄本人のものであるあるとすれば、湛然の「他宗批判」について最澄が言及した最初の箇所となろう。

最澄撰『血脉譜』における湛然

最澄撰『内相仏法相承血脉譜』(以下『血脉譜』)は、「最澄の仏法の系譜を記す書物。最澄の天台宗は、四種相承といつて、天台教学ばかりでなく、禪・大乘戒・密教を含む仏教であったが、それらの相承の系譜を示す²⁴」書物とされ、弘仁十年(八二〇)に成立している。

本書では、湛然の著作に関する言及が一箇所、湛然自身について言及する箇所が二箇所確認できる。前者は、「天台法華宗相承師師血脉譜一首」にある「雙林寺傳大士」の説明箇所に見られる。

謹んで案するに、無生義序に云わく、雙林大士、厥の名善慧、跡を示すこと人に同じく、功補處より高し。茲の土に居して、利物を懷となし、波羅蜜門をもって、恒に汲引をなす、と。また案するに、止觀義例に云わく、東陽大士、位は等覺に居し、なお三觀四運をもって、心要と為すと。

謹案、無生義序云、雙林大士、厥名善慧、示跡同人、功高補處。居于茲土、利物為懷、波羅蜜門、恒為汲引。又案、止觀義例云、東陽大士、位居等覺、尚以三觀四運、而為心要(『伝全』一、二二四)。

この箇所では、最澄が、南北朝時代の在家佛教者である傳大士〔四九七一五六九〕を解

²² 桑谷祐顯 [一九九九]。

²³ 最澄は、『守護章』において、たびたび基撰『法華玄賛』の誤りを指摘しているものの、湛然の著作を用いて批判した形跡は見あたらない。最澄撰『決權實論』、『法華秀句』にも同様のことが言える。また、『叡山大師伝』には『破比量文』が最澄真撰として挙がっておらず、その他の目録にも掲載されていない場合も見受けられる。ほかにも、最澄撰『破比量文』に関してはいくつか不自然な点が存在するため、その序文に関しても今後の検討を要する。

²⁴ 田村晃祐 [一九七九] (一九〇)。

説するために、湛然撰『止觀義例』(『大正』四六、四五二下)を引用している。見ての通り、湛然の思想との直接的な関係はない。

続いて、湛然自体に言及する箇所を確認したい。一箇所目は「天台法華宗相承師師血脉譜一首」の「荊溪湛然大師」の項目である。

謹んで案するに、仏隴道場記に云わく、左溪門人の上首、今之湛然大師なり。道高く識遠く、超悟辨達也。

謹案、仏隴道場記云、左溪門人之上首、今湛然大師、道高識遠、超悟辨達也(『伝全』一、二二七)。

傍線部は、最澄が、『仏隴道場記』²⁵に記載される湛然の項目を引用したものと見られる。もう一つの箇所は、「天台圓教菩薩戒相承血脉譜一首」にある「荊溪湛然大師」の項目である。これは、『天台山第六祖荊溪和尚碑』からの引用であると推察される²⁶、

謹んで案するに、唐台州国清寺、故荊溪大師碑銘に云わく、公は諱湛然、字は某なり。俗姓は戚氏。世は晋陵の荊溪に居す。その教を尊び、因りてもって号となす。教をもってこれを言えば、則ち龍樹の裔孫、智者の五世孫、左溪朗公の法子也。

謹案、唐台州国清寺、故荊溪大師碑銘云、公諱湛然、字某。俗姓戚氏。世居晋陵之荊溪。尊其教、因以為号。以教言之、則龍樹之裔孫、智者之五世孫、左溪朗公之法子也(『伝全』一、二三五一二三六)。

これらの箇所で目を引くのは、湛然に関する記述が非常に簡素である点である。『伝教大師全集』の行数で示せば、一箇所目の湛然に関する記述は一行半に過ぎない。これは、智顥が十二行半、湛然の弟子である道邃・行滿が二人合わせて約二頁費やしていることから見ても、非常に限られていると言えよう。最澄のもとには湛然に関する伝記が数多く残つており²⁷、資料不足であったとも考えにくことから、意図的にこれらを引用していないと

²⁵ 最澄が将来した『仏隴道場記』に関しては、池麗梅〔二〇〇八〕(二六二)に詳しい。

²⁶ 『天台山第六祖荊溪和尚碑』に関しては、池麗梅〔二〇〇八〕(二二一二九)を参照。

²⁷ 例えば『伝教大師将来越州錄』(『伝全』四、三七一一三八四)には、『天台山六祖略伝』、『天台山第六祖荊溪和尚碑』、『妙樂和上遺旨』、『祭第六祖荊溪和尚文』、『唐仏隴故荊溪大師讚』などが記載されている。

いう見方も可能になる。このように、最澄撰『血脉譜』においては、湛然の「他宗批判」に関する言及のみならず、「六祖」として特別視する姿勢も窺えない。

最澄撰『顕戒論』における湛然

最澄撰『顕戒論』とは、「最澄が大乘戒壇独立運動の過程で、南都の仏教を代表する機関である僧綱の反論を批判しながら、自己の戒律思想を最も詳細に論じた書物²⁸」とされ、弘仁十年（八一九）に成立したものである。

最澄撰『顕戒論』において、湛然の著名に言及する箇所は二箇所確認できる。一箇所目は、『法華經』の「安樂行」に関して最澄が言及する場面である²⁹。

開示其安樂行是上地行謬明拠四十。僧統奏じて曰わく、その安樂行、これ上地の行なり。地前の凡夫菩薩というに非ず。ゆえに經に云わく、菩薩摩訶薩なり（已上奏文）。論じて曰わく、持品の上位、四行を用いず。安樂の下位、必ず四行を修す。摩訶薩の言、定んで上下に通ず。（中略）湛然師の文句記に云く、二乗の人に近づきて、人をして菩提に遠からしむるゆえに、西方は雜せず。ゆえに或來と云い、すでにいまだ大を受けず。小志を妨ぐること無し。ゆえに隨宜と云う。

開示其安樂行是上地行謬明拠四十。僧統奏曰、其安樂行、是上地行。非謂地前凡夫菩薩故經云、菩薩摩訶薩也（已上奏文）。論曰、持品上位、不用四行。安樂下位、必修四行。摩訶薩之言、定通上下。（中略）湛然師文句記云、近二乘人、令人遠菩提故、西方不雜。故云或來、既未受大。無妨小志。故云隨宜（『伝全』一、一三八一一四〇）。

ここは、「僧統」が、四安樂行は初地以上の菩薩が修学する行であると最澄を非難している場面である。それに対して、最澄は湛然撰『文句記』（『大正』三四、三一九中）を引証の一つとし³⁰、安樂行は初地以前の者も行じることができると反論している。この箇所においては、単に語句の注釈として湛然撰『文句記』を引用したと見てよいだろう。

二箇所目は、以下の通りである。

²⁸ 田村晃祐 [一九七九] (六二)。

²⁹ 「安樂行」とは、「法華經安樂行品の所説。菩薩が惡世末法において、法華經を弘通するために安住すべき四つの法。即ち身・口・意・誓願の四安樂行」であるとされている（安藤俊雄・菌田香融 [一九七四] (四一五)）。

³⁰ このとき引用されているのは、『法華經』「安樂行品」（『大正』九、三七中）を湛然撰『文句記』が注釈した箇所である。

天台法華宗湛然師文句記に云く、次にこの品の下、來意を釈するにまた二あり。先に深行は須いざることを明かし、次に若初依より下は、正しく始行の須うる者のゆえに來ることを明かす。（中略）第三品にいたりて、正しくまさに法を説きて、もって自行を資くべし。説とは即ちこれ弘なり。理はこの品をもちいて、もって方法となすべし。已上は記文。

天台法華宗湛然師文句記云、次此品下、釈來意又二。先明深行不須、次若初依下、正明始行須者故來。（中略）至第三品、正当説法、以資自行。説即是弘。理須此品、以為方法。已上記文（『伝全』一、一四一一四二）。

二箇所目（傍線部以下）に関しても、湛然撰『文句記』（『大正』三四、三一七中）における『法華經』「安樂行品」の注釈箇所を引用しているに過ぎない。このように、最澄が『顕戒論』において湛然の著作を引用するのは『法華經』の注釈部分に限られており、それ以上の意図を見出すことができない。また、最澄撰『顕戒論』の同じ箇所には、湛然撰『文句記』とともに、慈恩大師基と嘉祥大師吉藏の著作が引用されていることからしても³¹、湛然の「他宗批判」を念頭に置いてはいなかつたようである。

最澄撰『上顕戒論表』における湛然

最澄撰『顕戒論』と同時に朝廷に提出された最澄撰『上顕戒論表』（弘仁十一年（八二〇）では、一箇所のみ「毘壇（湛然）」についての言及が見られる。

謹んで弘仁十載歲次己亥をもって、円戒を伝えんがために、顕戒論三卷、仏法血脉一卷を造し、謹んで陛下に進む。重ねて願わくば、天台圓宗両業学生、宗に順じて戒を授けんことを示し、本に依りて山に住し、一十二年、山を退かざらしめ、四種三昧、おのおの修練せしむ。（中略）最澄、識は一行に謝し、學は毘壇に恥づ。謹んで愚誠を獻じて、戰汗を倍増す。如し進表を允許したまわば、墨勅を降さんことを請う。伝戒の深に任ること無きに依り、謹んで奉表陳請以聞す。最澄誠惶誠恐謹言。

謹以弘仁十載歲次己亥、為伝円戒、造顕戒論三卷、仏法血脉一卷、謹進陛下。重願、天台圓宗両業学生、順宗示授戒、依本住山、一十二年、令不退山、四種三昧、各令修練。（中略）最澄、識謝一行、學恥毘壇。謹獻愚誠、倍增戰汗。如允許進表、請降墨勅。依無任伝戒之深、謹奉表陳請以聞。最澄誠惶誠恐謹言（『伝全』一、二六〇一二六一）。

³¹ 『伝全』一、一三九一一四〇。

傍線部では、最澄が「見識は一行に謝し、學問は毘壇（湛然）に恥じる」として、一行〔六八三一七二七〕と湛然を讚えていることが分かる。この箇所のみから最澄の思想を考察することは困難だが、少なくとも湛然の学識は評価していたと見てよいだろう。しかしながら、湛然の「他宗批判」についての言及はない。

最澄撰『秀句』における湛然

最澄撰『法華秀句』（以下『秀句』）とは、「最澄と徳一との論争書の最後のものと見られている書物³²」であり、弘仁十二年（八二一）の製作であるとされる。最澄撰『秀句』では、湛然の「他宗批判」に関する言及が二箇所見られる。一箇所目は次の箇所である。

有人問うて曰わく、法相宗の人、法華の贊を造りて、盛んに法華を弘む。その疏記等数百卷なり。また三論宗の人、法華疏を造りて、盛んに法華を講ず。今の天台法華宗は、何の異釈ありてか、二宗に勝れんや。答う。論の異釈のごときは、玄疏籤記四十卷、今一隅を指して、三方を知らしむ。法相宗の人、成唯識をもって尊主となし、法華の義を屈して、唯識に帰せしむ。法華經を贊ずといえども、還りて法華の心を死なす。ゆえに湛然の記に云く、唯識の滅種は、その心を死なす、と。まさに知るべし、その義懸かに別なることを。また三論宗の人、法華疏を造ると雖も、その義いまだ究竟ならず。このゆえに、嘉祥大徳、称心に帰伏す。（中略）まさに知るべし、法華の疏ありといえども、天台の釈に如かざることを。

有人問曰、法相宗人、造法華贊、盛弘法華。其疏記等数百卷。又三論宗人、造法華疏、盛講法華。今天台法華宗、有何異釈、勝於二宗耶。答。若論異釈者、玄疏籤記四十卷、今指一隅、令知三方。法相宗人、以成唯識為尊主、屈法華義、令帰唯識。雖贊法華經、還死法華心。故湛然記云、唯識滅種、死其心。當知、其義懸別、又三論宗人、雖造法華疏、其義未究竟。是故、嘉祥大徳、帰伏称心。（中略）當知、雖有法華疏、不如天台釈。（『伝全』三、二五一—二五二）。

この箇所は、「有人」が、法相宗や三論宗には『法華經』の注釈書があるが、天台宗はどういう『法華經』の注釈書によって二宗より優れていると主張するのか、と問うのに対して、最澄が反駁する場面である。ここでは、最澄が湛然撰『文句記』の一部を用いて、法相学派批判に転用していることが確認できる（傍線部）。

³² 田村晃祐〔一九七九〕（二二三）。

二箇所目は、「普賢菩薩勧發勝十」にである。

無相の家は、求めて義記を借り、尋ねて浅深を開き、足を天台に投じて、稟を法華に済く。然公の云く、嘉祥、身は妙化に沿いて、儀すでに神に灌ぐ。旧章先に行わるれば、理すべからく委しく破すべし。この大旨を識らば、師資成すべく、この一途に準じて、余もまた了すべし、と。ないしいわく、もし旧に依りてたつれば、師資は成ぜず。伏膺の説、施に靡く。頂戴の言奚んぞ寄せん。無相の家、旧の玄疏を改めて、天台に帰仰するに、その文墮ちず。なんぞ信ぜざるものならんや、なんぞ信ぜざるものならんや。

無相之家、求借義記、尋開浅深、投足天台、済稟法華。然公云、嘉祥、身沾妙化、儀已灌神。旧章先行、理須委破。識此大旨、師資可成、準此一途、余亦可了。乃至云、若依旧立、師資不成。伏膺之説、靡施。頂戴之言奚寄。無相之家、改旧玄疏、帰仰天台、其文不墮。何不信者哉、何不信者哉（『伝全』三、二七八一二七九）。

ここで、最澄が湛然撰『文句記』を引用し、三論学派批判を行っていることが見て取れる。以上の二点をみると、最澄は『秀句』において、湛然の「他宗批判」をはじめて導入していることが分かる。また、最澄によるこれらの排他的な他宗觀は、それ以前の他宗觀（「はじめに」で挙げた（一）～（三））から大きく変容していることも指摘できよう³³。

小結

これまで、最澄が、湛然とその著作について言及する箇所を確認した。整理すると以下のようになる。

（1）最澄撰『台州錄』・『越州錄』（貞元二年（八〇五）成立）

最澄は、湛然の著作ならびにそれに関する書物を二十五部請來したが、現存する著作の中で引用が確認できるのは七部のみである。

（2）最澄撰『依憑集』（本文：弘仁四年（八一三）成立）

諸宗の祖師が天台を賛嘆していることの証拠として、湛然撰『文句記』の記述を引用する。しかしながら、湛然の「他宗批判」は念頭に置いていないようである。

³³ この最澄の変化について、真野正順〔一九六四〕（三三一一三四六）は、最澄撰『秀句』以前を「前期宗觀念」、『秀句』以後を「後期宗觀念」と定義している。これに伴って、最澄の湛然觀も変化している蓋然性が高い。

(3)最澄撰『守護章』(弘仁九年(八一八)成立)

湛然の著作を参照している形跡が多くあるものの、その「他宗批判」について言及した箇所はなく、湛然を特別視している様子も看取できない。

(4)最澄撰『破比量文』(弘仁十年(八一九)成立)

序文には、湛然の思想に基づき、基撰『成唯識論掌中枢要』を批判するとあるものの、本文中に湛然の著作を引用している箇所はない。

(5)最澄撰『血脉譜』(弘仁十年(八一九)成立)

「天台法華宗相承師師血脉譜一首」、「天台円教菩薩戒相承血脉譜一首」には湛然の項目があるものの、他の祖師と比較すれば極めて簡素である。また、湛然の「他宗批判」についても触れていない。

(6)最澄撰『頤戒論』(弘仁十年(八一九)成立)

『法華經』『安樂行品』の注釈として湛然撰『文句記』が引用されているが、同様に基と吉藏の著作も引用されるため、湛然の「他宗批判」は考慮されていない。

(7)最澄撰『上顕戒論表』(弘仁十一年(八二〇)成立)

最澄は「見識は一行に謝し、学問は毘壇（湛然）に恥じる」として、一行と湛然を讃えている。この箇所のみから最澄の思想を考察することは困難だが、少なくとも湛然の学識は評価していたと見られる。しかしながら、湛然の「他宗批判」について言及はされていない。

(8)最澄撰『秀句』(弘仁十二年(八二一)成立)

湛然撰『文句記』を引用し、「天台法華宗」が法相・三論・華厳よりも優れている点を強調している。これは、湛然の「他宗批判」と同様の意図が最澄にあったことを示すものだろう。

以上の点を整理すると、帰朝後から弘仁十一年ころまでの最澄は、湛然とその著作に言及する場合、語句を註釈する箇所がほとんどであり、その「他宗批判」には触れていないことが分かる。そもそもこの時期の最澄は、華嚴学派の澄觀〔七三八一八三九〕や、法相学派の基〔六三二一六八二〕の文言も同様に引用するなど、諸宗が協力して護国に励むことを願っており、湛然の「他宗批判」は意識していないかったようである。ところが、晩年の弘仁十二年には、諸宗を尊重する他宗觀を取り除き、湛然の「他宗批判」を支持するに至っている。

つまり、もともと最澄は湛然の「他宗批判」を受容する意図はなかったものの、最晩年にはその姿勢を改め、湛然の位置を高めるようになったと見られる。

問題となるのは、湛然の「他宗批判」を当初の最澄が受容していない点である。これに関して、最澄が独自にそうしたのか、あるいは師である道邃の指示によるものなのかは現段階で判断できない。仮に、道邃からの示唆によるものならば、湛然一道邃一最澄という

系譜に何らかの断絶があった根拠となり得るだろう。それらの検討は今後の課題したい。

凡例

- 一、旧字体は原則的に通行体に改めた。
- 一、参考文献の頁数は、書籍の場合のみ（）内に記した。
- 一、人物の生没年は、〔〕内に数字のみで示した。
- 一、引用文中の圈点、傍点は省略した。

一次文献ならびに略号

『印仏研』・・・『印度学仏教学研究』

『園城寺文書』

『新続藏』・・・『新纂大日本続藏經』

『大正』・・・『大正新脩大藏經』

『伝全』・・・『伝教大師全集』

『日藏』・・・『日本大藏經』

『日仏全』・・・『大日本佛教全書』

※その他の『妙法蓮華經』『大般涅槃經』『大方廣佛華嚴經』等の主要な仏典、ならびに『妙法蓮華經玄義』『妙法蓮華經文句』『妙法蓮華經玄贊』などの論疏については、慣例（『法華經』『涅槃經』『華嚴經』『法華玄義』『法華文句』『法華玄贊』等）に従う。

二次文献

浅井円道〔一九七三〕『上古日本天台本門思想史』（平楽寺書店）

淺田正博〔二〇〇二〕「伝教大師における宗派意識の推移について」（『日本佛教綜合研究』創刊号）

荒槻純隆〔一九八七〕「唐中期における天台教勢—湛然の法統をめぐって—」（『大正大学大学院研究論集』一一）

安藤俊雄〔一九七三〕『天台性具思想論』（法藏館）

安藤俊雄・菌田香融〔一九七四〕『最澄』（日本思想大系四、岩波書店）

安藤俊雄〔一九七八〕『天台学 根本思想とその展開』（第五刷、平楽寺書店）

池田魯参〔一九八一〕「湛然教学における頓漸の概念—澄觀教学との対論—」（『南都仏教』四七）

伊吹敦 [二〇一三 (一)] 「道璿は天台教学に詳しかったか?」(『印度学仏教学研究』六一二)

伊吹敦 [二〇一三 (二)] 「鑑真は来日以前に聖徳太子慧思後身説を知っていたか?」(『印度学仏教学研究』六二一一)

伊吹敦 [二〇一三 (三)] 「初期禪宗と日本佛教一大安寺道璿の活動とその影響ー」(『東洋学論叢』三八)

伊吹敦 [二〇一四 (一)] 「最澄の禪相承とその意義」(『天台学探尋—日本の文化・思想の核心を探るー』所収、法藏館)

伊吹敦 [二〇一四 (二)] 「聖徳太子慧思後身説の形成」(『東洋思想文化』一)

伊吹敦 [二〇一六] 「法進撰『梵網經註』について—佚文より窺われる特徴と最澄への影響ー」(『印度学仏教学研究』六五一)

上杉文秀 [一九三六(一)] 『日本天台史』(再刷版、破塵閣書房)

上杉文秀 [一九三六(二)] 『日本天台史 別冊附録』(再刷版、破塵閣書房)

大久保良峻 [二〇一五] 『最澄の思想と天台密教』(法藏館)

大久保良順 [一九六五] 「六祖門下の文句研究と円鏡について」(『叡山学報』四)

奥野光賢 [一九九三] 「最澄の三論批判」(『印度学仏教学研究』四二一一)

木内堯大 [二〇〇八] 「伝教大師における法藏教学の受用—同時四車をめぐって」(『仏教文化:多田孝正博士古稀記念論文集』、山喜房仏書林)

桑谷祐頤 [一九九九] 「最澄撰『通六九証破比量文』について—最澄に見る湛然教学の影響ー」(『天台学報』四二)

吳鴻燕 [二〇〇七] 『湛然『法華五百問論』の研究』(山喜房仏書林)

佐伯有清 [一九九三] 『最澄とその門流』(吉川弘文館)

佐藤泰雄 [一九九五] 『摩訶止観輔行搜要記』の研究』(『天台学論集』四)

塩入亮忠 [一九一八] 「山家と徳一との二乗成仏論」(『山家学報』八)

進藤浩司 [二〇〇八] 「最澄の經宗と論宗について—華嚴学との関わりからー」(『東アジア仏教研究』六)

関口眞大 [一九五九] 「禪宗と天台宗との交渉」(『大正大学研究紀要 文学部・仏教学部』四四)

関口眞大 [一九六九] 『天台止観の研究』(岩波書店)

多田孝文 [一九七九] 「妙経文句私記にみられる全師」(『印度学仏教学研究』二七一二)

田村晃祐 [一九七九] 『最澄辞典』(東京堂出版)

田村晃祐 [一九八八] 『最澄』(新装版人物叢書、吉川弘文館)

田村晃祐 [一九九二] 『最澄教学の研究』(春秋社)

池麗梅 [二〇〇八] 『唐代天台佛教復興運動研究序説 荊溪湛然とその『止観輔行伝弘決』』(大蔵出版)

寺井良宣 [一九八九] 「「守護国界章」における最澄の徳一批判—法相教学批判とは区別さ

れる徳一固有への批判ー」(『印度学仏教学研究』三七一二)

長倉信祐 [二〇〇三] 「湛然の禪宗批判の一断面—『摩訶止観輔行伝弘決』を中心にー」(『天台学報』四六)

長倉信祐 [二〇〇五] 「『金鉢論』の対破者をめぐって」(『印度哲学仏教学』二〇)

長倉信祐 [二〇一九] 「湛然教学の諸問題:対破者の議論をめぐって」(『印度学仏教学研究』六八一一)

長倉信祐 [二〇一九] 「湛然と密教」(『仏教の心と文化 坂本廣博博士喜寿記念論文集』、山喜房仏書林)

中里貞隆 [一九三四] 「荊溪湛然の門下と其の著書」(『山家学報』(新)九)

英 亮 [二〇二一] 「最澄における清涼澄觀の位置」(『東海仏教』六六)

松森秀幸 [二〇一〇] 「智度とその著作『天台法華疏義讚』について」(『印度学仏教学研究』五八一二)、

松森秀幸 [二〇一一] 「『天台法華疏義讚』における『法華文句記』批判について」(『印度学仏教学研究』五九一二)

松森秀幸 [二〇一六] 「唐代天台法華思想の研究—荊溪湛然における天台法華經疏の注釈をめぐる諸問題ー」(法藏館)

真野正順 [一九六四] 「仏教における宗観念の成立」(理想社)

水上文義 [二〇〇八] 『台密思想形成の研究』(春秋社)

師茂樹 [二〇一五] 『論理と歴史 東アジア仏教論理学の形成と展開』(ナカニシヤ出版)

吉津宜英 [一九八七] 「華嚴教学への最澄の対応について」(『華嚴学研究』創刊号)
[一九九七] 「中国華嚴学派の人々による天台教学の依用—特に天台への澄觀の「依憑」に着目してー」(『天台大師研究』、祖師讚仰大法会事務局天台学会)

由木義文 [一九七四] 「最澄における華嚴思想の影響—特に守護国界章を通してー」(『南都仏教』三二)

渡邊守順 [一九九二] 『伝教大師著作解説』(叡山学院)

(大谷大学大学院博士後期課程)